

梁啓超と徳富蘇峰

——馮自由「日人徳富蘇峰与梁啓超」と
梁啓超の「盗用」をめぐる——

川 尻 文 彦

日本亡命以降の梁啓超（1873-1929）は精力的な言論活動を行った。その多彩な言論活動の背後には「東学」があったことが知られている。「東学」とは主として日本における西洋の政治、経済、法律、学術などの日本語で記された西洋情報のことを指す。改革を志す中国知識人にとってこの種の西洋情報は何としても入手したいものだった。しかし彼らがこれらの情報を西洋語文献から直接得るには、言語的なハンデをはじめ多くの障壁が存在した。そのため近代的な学問の制度がようやく整いはじめた明治日本における各種の著述を参考にし、そのまま中国に「輸入」した。そのことは中国語世界において梁啓超が最先端の世界知識の伝道者としての名声を確立することに大きく寄与したとみられる。

梁啓超は自ら依拠した日本語の「種本」について語ることはほとんどなかった。自らの「知的ソース」を明かすことは、旺盛な執筆活動の「秘技」を公開することにつながるし、自らの著述活動の「独創性」に疑問符を投げかけることになるであろう。類似した状況は、「輸入学問」といった言葉に代表されるように、今日の人文社会系の学術界にさえも見うけられる。「知的所有権」の概念がなかった清末の中国においては「盗用」もやむをえまい。

梁啓超の学問が「東学」の焼き直しに過ぎないという「噂」は当時から絶えなかったらしい。しかしこの「噂」について正面から論じた文献は多くない。その数少ない例外が馮自由『革命逸史』（第4集、1946年初版）に載った「日人徳富蘇峰与梁啓超」である。本稿では馮自由の「日人徳富蘇峰与梁啓超」を導きにして梁啓超と徳富蘇峰の思想的関係について若干の考察を試みるものである。



馮自由の「日人徳富蘇峰与梁啓超」では以下のように述べられている。

「けだし、清末時期の我が国の文学の革新について、世の人たちは大いにその功績を梁任公（啓超）が主編をつとめた『清議報』と『新民叢報』に求めている。しかし、任公の文章はその大部分を蘇峰から得たものである。試みに『清議報』と『新民叢報』から採られた『飲氷室自由書』を当時の『国民新聞』の論文及び民友社の『国民小叢書』とひとつひとつ対照させてみたら、その字句が多くは蘇峰に求められるだけでなく、その筆法もまた十のうち九は蘇峰に倣ったものである。このことは蘇峰の文学が我が国の文学の革新に間接的に与っていることであり、影響はきわめて大きい。『新民叢報』が初期に大いに社会に歓迎された原因の一つでもある¹⁾。」

ここではっきりと述べている。梁啓超が徳富蘇峰の『国民新聞』や民友社の出版物から「盗用」し、その「盗用」によって『清議報』や『新民叢報』の論説が精彩あるものになったことによって、世人から歓迎されることになった。清末における「文学革命」の功績も梁啓超ではなく、徳富蘇峰に帰せられる、と。

さらに続けて、「任公はただ他国の文学家の著作を剽襲しただけではなく、出所を隠し、一貫して美をかすめ取ることを能くし、ついには留学生志士の厳しい指摘をまぬかれることができなかつた」と述べる。つまり、梁啓超は意図的に「盗用」を隠したのである。

梁啓超はなぜ徳富蘇峰に目をつけたのか。その一端をうかがえる馮自由の興味深い指摘がある。

「蘇峰は漢学に長じており、その文章は日本語の片仮名を削除して虚字に易えるだけで、すぐに一篇の素晴らしい漢文になった。任公の日本語のレベルはわずかに門径を知るくらいだが、それでも中国語に翻訳して文章をなすことができた。」

漢字の多い漢文体の日本語を得意としていた徳富蘇峰の文章は、日本亡命直後で、日本語力の乏しかった梁啓超にとっても読解が容易であったというのである。まさに「和文漢読法」の実践である。

二

徳富蘇峰（1863-1957）は、94歳という長寿を全うし、その生涯を通じ明治中期から昭和敗戦後まで活躍し影響力をもち続けた思想家であり文筆家である。

文久3（1863）年、肥後の国水俣に生まれ、熊本洋学校から、明治9（1876）年上京するものの、数ヶ月で京都の同志社に入り、新島襄に傾倒したが、間もなく上京。明治13年、郷里熊本に戻り、大江義塾を主宰しつつ、明治19（1886）年、「当時有する総ての思想、一切の知識、凡有の学問を傾倒し尽くさんと企てた」『将来之日本』を発表した。この『将来之日本』は蘇峰の「出世作」となった。これを契機にふたたび上京した蘇峰は、明治20年、民友社を立ち上げ、我が国最初の総合雑誌となる『国民の友』を創刊し、「平民主義」に基づく進歩的な社会評論をのせた。同23年、「新聞記者」として『国民新聞』を創刊、社長兼主筆となり藩閥政府への批判に筆を振るった。その鋭い舌鋒は明治の青年知識人に絶大の影響力を誇った。ところが、明治30年、松隈内閣（第二次松方内閣。松方正義首相、大隈重信外相）の内務省勅任参事官に就任したため世間から「変節」を非難された。この「変節」は日清戦争後の三国干渉で西洋列強の横暴を知ったことがその要因のひとつであるといわれている。その後次第に国家主義に傾き、日本主義を唱え、日露戦争には政府を支援、同44年貴族院議員、大正2（1913）年桂太郎の死を機に政界を退き、昭和4（1929）年、大阪毎日、東京日日の社賓に迎えられた。満州事变当時から軍部に協力、超国家主義、皇室中心主義を唱えたため、終戦後に公職から追放された。昭和27年、壮大な歴史長編『近世日本国民史』を完成した。このほか『将来の日本』、『吉田松陰』、『我が交遊録』、『蘇峰自伝』等の300冊を超える著書がある。

しかし、彼についての専門的研究は多くはない。彼が異様な多作であり、思想の転変が激しく、彼の思想の全体像をとらえるのが困難であることと、戦中の戦争協力的な言動が後世に研究者に忌避されたことが挙げられるであろう。全集はおろか著作集すら公刊されておらず、研究の遂行に困難がある。しかし、近年徳富蘇峰の「再評価」の機運が起り、彼の多面的な著述活動に焦点が当てられている。私の研究動機もその機運を受けてのものである。

1898年に日本に亡命した梁啓超と徳富蘇峰の影響関係を考える場合、さしあたり私たちの考察対象となるのは、明治中期における徳富蘇峰の著述活動ということになる。

『十九世紀日本の青年及其教育』(明治18年)に引き続き発表され、蘇峰の文名を一躍高めた『将来之日本』(明治19年)は「専らスペンサーの進化説やミルの功利説や、抑々又コブデン、ブライト等のマンチェスターの派の非干渉主義や、若しくは横井小楠の世界平和思想や、それ等のものに倣つて、予一個の見識を打ち建てた」(『蘇峰自伝』)という。

『将来之日本』は、スペンサーやマンチェスター・スクールといった当時のイギリスの経済的自由主義の斬新な用語や理論を援用しつつ、武士社会から平民社会への転換という当時の日本が実現した歴史的事実が、封建社会的な(「貴族的」「腕力的」)アリストクラシーから産業的な(「平民的」「平和的」)ブルジョワジーの支配への移行という西欧社会の社会発展の図式にも合致することを論証し、それをいっそうの西欧化の理論的根拠として唱導するものだった。そして十九世紀の新しい「文明」を担う「青年」こそがこれからの日本を導いていかないといけないという世代交代の主張や、西欧の新思想や理論をちりばめた華麗な文章が知識青年層の多くの支持を得た²⁾。

ここで注意しなくてははいけないのは、『将来之日本』の骨格はもっぱら英語文献によっていることである。文久3年(1863年)生まれの蘇峰は、内村鑑三、新渡戸稲造、三宅雪嶺といった同時代の文人たちと同様、明治の第二世代、つまりいわゆる「英語名人世代³⁾」(太田雄三)に属することである。蘇峰の回想によると明治9年に最初に上京したときに門をたたいた英語学校では、交流はなかったものの、新渡戸稲造、内村鑑三と同校同級であった。彼らは札幌農学校に移りクラークの門人となり、蘇峰は京都に移り住む。いずれにせよ、英語を徹底的に叩き込まれ、英語で外人教師から教育を受けたのである。蘇峰自らは「英語力は覚束なくあった」と謙遜するが⁴⁾、蘇峰も「修行時代」には西欧文明の圧倒的な力を、スペンサー、コブデン、トックビル、マコーレーらの洋書を日々読みふけることで感じていたのである。

蘇峰の『読書九十年』を読むと彼の青年期の読書傾向がよく分かる。当時の習いに従い、子供の頃より漢学塾に通い、四書五経の素読から『左伝』『史記』『唐宋八家文』『資治通鑑』を読むに至った。父徳富淇水は横井小

楠の高弟としても知られており、書香の家に生まれたといってもよい。仮名文で書かれた細川家の藩主物語である『銀台遺事』、『藩譜撮要』や中国の軍談物で『武王軍談』（殷紂王と周武王の戦い）、『呉越軍談』（越王勾踐）、『漢楚軍談』（楚項羽と漢劉邦）などを好んで読んだという⁵⁾。和洋漢の古典を貪り読んでいることがうかがえる。これは「英語名人」世代の特徴でもあろう。英語の勉強だけではないのである。

英学の最先端の知識をちりばめた和洋漢融合の文体が、この時期の蘇峰の著作の特長であろう。好評を博した短編エッセイ集『静思余録』（1893年）もその特長が遺憾なく発揮された小品である。

三

『飲氷室自由書』は短編のエッセイ集である。『飲氷室自由書』は1899年に『清議報』第25冊（8月26日）から掲載が始まった。1905年まで断続的に『清議報』、『新民叢報』に連載され、あわせて64篇を数える。「叙言」によると「東鱗西瓜、竹頭木屑」[こまごまとしてまとまりのないものだが、しっかりした内容のもの]と謙遜しているが、日ごろ書き溜めたものだという。「西儒弥勒・約翰（ジョン・ミル）曰く、人群の進化は思想自由、言論自由、出版地自由より要なるはなし。三大自由はすべて自分に備わっているので、我が書に名付けた。」という。梁啓超自身は記していないが、徳富蘇峰の『静思余録』（1893年、民友社）などの体裁に倣ったものである可能性もある。

この『飲氷室自由書』の中で、梁啓超みずから徳富蘇峰の「翻案」である旨を明記したものは、

「無名之英雄」（『清議報』37冊、1900年3月）（徳富蘇峰「無名の英雄」『基督教新聞』204号、1887年6月。『静思余録』再録）

「無欲与多欲」（『清議報』99冊、1901年12月）（徳富蘇峰「無欲と多欲」『国民新聞』1894年12月1日。徳富蘇峰『第二日曜講壇』民友社、1902年再録）

「机挨の格言」[机挨はゲーテ]（『清議報』100冊、1901年12月）（蘇峰生「ゲーテの格言」『国民新聞』1900年8月5日。徳富蘇峰『日曜講壇』民友社、1900年再録）

の3編のみである。実はそれほど多くはない。

このほかに

「天下無無価之物」(『清議報』39冊、1900年3月)(徳富蘇峰「天下に無代価の物なし」『国民新聞』1894年1月13日、徳富蘇峰『第二静思余録』民友社、1895年再録)

「説希望」(『新民叢報』31号、1903年5月)(徳富蘇峰「僥倖心及び冒険心」『国民之友』77号、1890年3月および「希望」『国民之友』149号、1892年3月。ともに『静思余録』再録)

の諸篇が、徳富蘇峰の諸エッセイに対応関係が確認できるという(以上、石川禎浩の調査に依拠⁶⁾)。

また『新民説・第7節進取冒険』には「僥倖心及び冒険心」(『国民之友』77号、1890年3月、『静思余録』再録)の参照の跡が見られるという⁷⁾。

以上は、後世の研究者による指摘であるが、「煙土披里純 (INSPIRATON)」については事情が異なる。

「煙土披里純 (INSPIRATON)」(『清議報』99冊、1901年12月)(徳富蘇峰「インスピレーション」『国民之友』22号、1888年5月。『静思余録』再録)は、梁啓超の「盗用」の事実が当時から知られていた。『革命逸史』にはこの「煙土披里純 (INSPIRATON)」について以下のような記述がある。

「辛丑の年(民国前11年)[1901年]の秋から冬にかけて、蘇峰は一つの短文を国民新聞に発表した。題目はInspirationであった。ひと月後、横浜の『清議報』の『飲水室自由書』で漢文に翻訳し、「煙土披里純」と題した。文章全体の内容は『国民新聞』と同じであった。……読者は任公が日本語に通じているだけではなく、英文にも深く通じていると考え、彼の学問の深く博いことに大いに感心した。思いがけず二か月後、上海で出版された『新大陸』雑誌が立ち上がり批判をはじめ、『国民新聞』と『清議報』を並列し、相互に対照した。いうには、任公は不当に蘇峰の文章を剽窃し自分のものであるとしており、悪さをして他人の手柄を横取りしている。恥知らずなこと甚だしい、と⁸⁾。」

樽本照雄の考証によると、徳富蘇峰「インスピレーション」は『国民新聞』ではなく『国民之友』第22号(明治21年(1888年)5月18日)に最初に掲載された。発表年は1901年ではなく1888年である⁹⁾。また梁啓超を批判したのは『新大陸』ではなく『大陸報』(1902年12月-1906年1月)である。このあたりの誤記は馮自由の記憶違いによるものであろう。馮自由『革命逸史』全体に通じることであるが、馮の記憶に基づいて書いてい

る部分が多く、細かい事実関係の誤りが多い。

この「インスピレーション」は後に『静思余録』（『国民叢書』第4冊、民友社1893年）に収録された。この『静思余録』は評判もよく売れ行きも良かったとされ、そのうちとくに評価の高かったものが、冒頭論文の「インスピレーション」であった。この『静思余録』にはエマーソン（1803-82）の名著『随筆集』（Essays 1844年）がそこかしこに投影されている。「インスピレーション」は『随筆集』の「大霊論」（The Oversoul）や「詩人論」（The Poet）の論旨や表現と重なった部分がみられるという¹⁰。

「煙土披里純（INSPIRATON）」（『清議報』第99冊、1901年12月）の発表後、しばらくして『新民叢報』第26号（1903年2月）に「叢報之進歩」を發表し、『大陸報¹¹』に批判を加えたことから、『大陸報』（第6期以降）の側から反撃を受けたとされる。

「叢報之進歩」は当時盛んになった在日中国人のジャーナリズム活動を『新民叢報』の側（無署名だがおそらく梁啓超であろう）から個別に論評したものである。これまであまり紹介されておらず、史料的価値もあろうかと思うので、長めに引用する。

「数ヶ月来、ほぼ満足できる一現象は叢報の発達である。昨年本報が創刊されてから、今に至るまで同じ体例、同じ格式で発行された叢報はほぼ十家に近い。上海の新世界報が最も早く、大陸報がこれに次ぎ、東京の湖南学生所が出した遊学訳編がこれに次ぐ。訳書彙編も第二年第九期以降翻訳稿の掲載誌から転換した。今年正月東京の湖北学生は「湖北学生界」を、浙江学生は「浙江潮」を創刊し、江蘇学生も一報を出すという計画がすでに熟して今まさに印刷中であるとのことである。……その質は訳書語彙が最も良く、浙江潮がこれに次ぎ、湖北・湖南がこれに次ぎ、新世界報と大陸報がこれに次ぐ。¹²」

大陸報は一番下のランクである。さらに続けて、

「大陸報はそれほど的外れな言葉はなく、新世界学报より優っている。しかしその文章はこれよりさらに劣る。いいかげんな内容が全体の半分を占め、あまり大した内容がない。」と酷評している。

『大陸報』第6期（1903年5月）の「敬告中国之新民」では、梁啓超を名指しで批判している。「大陸報はいいかげんなごまかし〔原文は敷衍〕であるというが、はたして新民叢報はいいかげんなごまかしでないということが出来るのか¹³。」と疑問を投げかけ、「徳富蘇峰の断片的な一言二言

を拾い集めては『自由書』を書きあげた。『理学沿革史』や『歴伝体西洋哲学小史』(ママ)を担いで免園の冊子にし、西洋学派を語っているだけである¹⁴⁾。」という。『歴伝体西洋哲学小史』は、おそらく中島力造『列伝体西洋哲学小史』富山房、1898年の誤記。ここで注目されるのは、すでに中江兆民の『理学沿革史』を「西洋学派」を名乗る梁啓超の「種本」であると看破していることである。中江兆民『理学沿革史』が梁啓超の西洋哲學家理解の種本であることを数十年の歳月を経てようやく発見したのは、当代の学者宮村治雄の功績である。しかし、「噂」の域を出なかったのかもしれないが、当時の中国人留学生たちには見透かされていたのである。

同期(第6期)で「新民之旧友」と署名のある「与『新民叢報』総撰述書」では「足下の『飲氷室自由書』例えば「煙斯披里純」などのごときは、すべて日本の徳富蘇峰君の『国民叢書』から出ている。筆を振るってそのまま書いており、一字も改めず、みずから題して任公著と言っている。その他の各文中にもこの類ものは枚挙に暇がない。そうであれば、足下は新聞記者のなかの一乞食、一盗人にすぎない¹⁵⁾。」と。つまり『飲氷室自由書』は蘇峰の『国民叢書』からの剽窃であると証拠を挙げ、梁啓超に対して厳しい批判の言葉を投げかけている。

『新民叢報』を攻撃した『大陸報』は興味深い雑誌であるが、無署名記事が多いうえ、思想傾向も一定ではなく、どのような雑誌であるのか性格づけが難しい。『革命逸史』に『新大陸』(ママ)雑誌についての説明がある。

「『新大陸』(ママ)雑誌は東京の留学生界が出版した『国民報』の後身である。『国民報』は革命志士の戢元丞、沈翔云、秦力山、王寵恵及び私が創刊したもので、四期発行したが、すぐに資金難により停刊した。そこで戢元丞、秦力山はこれとは別に『新大陸』を上海で創刊し、革命を鼓吹し、保皇を攻撃し、あますところなかった。ゆえに終始一貫してこの機会を利用して、康梁の詐術を暴いた。このとき、任公が蘇峰の文章を剽窃したことを糾弾したのは、その一端であった。任公は『新大陸』雑誌の指摘を受けて、寒空の蟬のように押し黙り、一言も発しなかった。思うに、反論は難しいと知って、撤退したのであろう¹⁶⁾。」と記す。馮自由によれば、『大陸』と『新民叢報』のやり取りは『新民叢報』の完敗に終わったのである。

四

『革命逸史』の著者馮自由（1882-1958）は原名懋龍、字は建華、別名に海桴がある。原籍は広東南海。太平天国の混乱のなか、父馮鏡如は横浜に移り住み商いを始める。1882年横浜に生まれる。同郷の孫文が日本で革命運動を始めると馮鏡如は経済的援助を行った。14歳の時に父馮鏡如とともに横浜で興中会に加盟、馮家は革命党の連絡拠点となった。1898年、康有為、梁啓超が日本に亡命し、99年横浜で保皇会を立ち上げ、「自由、独立」に反対する言論を展開したことに対抗して、1900年馮懋龍から馮自由に改名したとされる。同年、鄭貫公らと『開智録』半月刊、天賦人權、自由平等思想を鼓吹した。1905年に中国同盟会が東京で成立した時の創立メンバーの一人となり、同盟会評議員に任ぜられた。ほどなくして革命工作のため香港に戻り、同盟会香港分会会長となり、『中国日報』社長兼総編集となった。孫文の革命綱領の宣伝につとめた。この時期、ラトーゲンの『政治学』を日本語から中国語に重訳したことでも知られる。

辛亥革命後は孫文の秘書をつとめ、また孫文が下野した後も北京で臨時政府稽勲局局長の職などにあり、「最も若い党内の元老」と称され、三民主義の宣伝につとめた（「民生主義与中国政治革命乃前途」1919年）。その後、国共合作に反対し、1925年の孫文死後には蒋介石の独裁にも不満を示した。1920年代半ば以降は文筆活動に専念し、国民党内で閑職に迫いやられた。彼の代表的著作である『中華民国開国前革命史』、『革命逸史』が書かれたのもこの時期である。1951年8月、台湾に移り、1958年4月台北で死去。

『革命逸史』は「出版説明」によると1936年に執筆が始められ、あしかけ12年をかけて、1948年に完成した。1939年から1947年にかけて商務印書館から順に5集（計106万字）が刊行され、1981年に第6集（14万字）が刊行されて完結した。

清末時期の革命団体や革命党人についてそもそも史料は少ない。革命活動は秘密裡に行われるものであるから史料を残さないのは当然である。革命活動の実態なるものは誰にも分からない。馮自由は最初期の興中会結成時から孫文と接触をもち、行動を共にし、孫文の革命活動をつぶさに観察してきた。しかも孫文の周辺にいた革命党人たち——黄興、宋教仁、張靜江、章炳麟、徐錫麟、林森、居正、胡漢民、吳遲暉、汪精衛、張繼、鄒魯、

謝持など——と交遊をもっていた。その意味で清末時期の革命運動について馮自由が持っていた生の情報量は圧倒的である。稽勳局局長時期には北京での革命史料の収集を行い、手元にある書置きや書信を頼りに、『革命逸史』を書き上げた¹⁷⁾。国民党の元老孫科が「取材精審、考証確切」であると序を寄せていることは、権威づけにもつながったとみられる。馮自由が反共の立場をとっていたため大陸の学者には長く忌避はあったものの、出版当初から『革命逸史』に対する評価は高く、清末革命を知る第一級の史料として扱われてきた¹⁸⁾。「孫文神話」、「革命史」叙述を支える史料でもある。

『革命逸史』については史料批判が行われにくい。周辺の歴史史料をかき集め、つなぎ合わせて、馮自由の描く歴史像を崩していくよりほかないであろう。近年、そのような研究作業はすでに行われている¹⁹⁾。

梁啓超が『革命逸史』で一節を割いて取り上げられ登場するのは、「日人徳富蘇峰与梁啓超」のみである。これまでの叙述でもわかるように、馮自由には梁啓超を貶める意図がはっきりあり、梁啓超に対する評価は厳しい。

五

1899年に梁啓超がハワイに向かう船上で「国民叢書」数種を携え、「文学革命」を着想したと「夏威夷遊記」で語っている。また同年、梁啓超は『国民新聞』を主宰していた徳富蘇峰に書簡を送り、面会の希望を申し出ている(1899年10月31日付け、同志社大学所蔵)こともよく知られている。梁啓超の亡命直後から徳富蘇峰に関心を寄せていることが分かる。

徳富蘇峰と福沢諭吉は同じ明治を代表する知識人であるが、世代異なっている。福沢諭吉(1835-1901)は天保年間の生まれで、1898年に梁啓超(1873年生まれ、満25歳)が日本に亡命した時にはすでに最晩年であり、63歳。いわゆる「天保の老人」に属する。徳富蘇峰は1863年生まれであるから当時35歳で脂が乗りきった新進気鋭の言論人であった。蘇峰は梁啓超にとって年齢的にも身近な存在であったといえるであろう。

徳富蘇峰は、1917年の二度目の訪中時に清朝の官員から、徳富蘇峰は日本の梁啓超、梁啓超は中国の徳富蘇峰である、と言及されたエピソードを記している(『支那漫遊記』)。また『支那漫遊記』で、曹汝霖、張継ら

は日本にいたとき「国民叢書」の愛読者であったと言ったという。徳富蘇峰の編纂による「国民叢書」は日本人のみならず、中国人留学生にも反響があったのである。

『新民叢報』と『大陸』の論争を通じて、梁啓超と徳富蘇峰の影響関係についての情報は中国知識人に誇大に刷り込まれた可能性がある。

中江兆民は「議論時文の最なる者五人」として福沢諭吉、福地桜痴、朝比奈碌堂、徳富蘇峰、陸羯南を挙げ、「蘇峰直訳体けだしほとんどその創立するところにして、一時天下を擅（ほしいまま）にせり²⁰⁾。」と述べている。中江兆民は蘇峰の文体を「直訳体」と見なし、一世を風靡したと記している。

中江兆民の指摘を受けて、梁啓超と徳富蘇峰の影響関係をとくに「新文体」の観点から論じたのが、北京大学中文系の夏曉虹である²¹⁾。夏曉虹は清末文学史で必ず言及される梁啓超の「新文体」に最も影響力が大きかったのが徳富蘇峰であるとみなす。夏曉虹は、徳富蘇峰の漢文調と欧文調の文体は清末中国に大きな影響を与え、梁啓超による模倣と融合を経て「新文体」と生まれ変わり、全国を風靡した、とする。しかし、「翻訳（欧化）体」以上の指摘はなく、実証面での説得力が不足しているように思われる。

文体は措き、小説観念の点で梁啓超と徳富蘇峰の関係は浅くないと指摘するのが齋藤希史である。梁啓超への影響関係は少なくとも断片的な知識のレベルではなく、決定的なもので、「感動をともなっていた」とする²²⁾。私は現時点で齋藤の見解（文学的センスにあふれ博識な論文に圧倒されるが）を全面的に検討する用意はないが、少なくとも梁啓超にとって着想のヒントを得たことは間違いないであろう。

私たちがしばしば目にするのは、日本語文献から仕入れた断片的な情報を自分の論理の中に組み込んでいく梁啓超の巧みさである。以下、簡単に触れておく。

梁啓超『中国四十年來大事記』（1901年12月に完成し、新民叢報社から刊行された²³⁾）と題された李鴻章伝のなかで、徳富蘇峰の「李鴻章」（『国民新聞』明治34年11月10日）を引用していることである。徳富蘇峰の「李鴻章」は李鴻章の死去直後に書かれたものである。「東洋のビスマルク」と当時世界で言われていた李鴻章評価を覆した梁啓超の李鴻章評価そのものが一個の研究課題である。梁啓超みずから「はしがき」で西洋の伝記の形式を模倣したというように、東西古今の人物との比較も行っている。

徳富蘇峰の「李鴻章」については、李鴻章という人物の真相を少しも残らず描写しきっていると評している。

『新民説』でも徳富蘇峰をひそかに引用している。『新民叢報』第5号(1902年4月)の「論進取冒険」の中で徳富蘇峰の名前を出さずに「煙土披里純」に言及し、アレクサンドロスのペルシア遠征出征時の故事についても徳富蘇峰「僥倖心及冒険心」に由来するとみられる。しかしその後は『史記・李將軍列伝』の李広が石を射る故事と絡めて議論を展開している。中国人にとってなじみの深い李広の故事を提示することによってイメージを膨らませることを容易にする効果を狙ったものとみられる。

徳富蘇峰『吉田松陰』(1893年)は、1903年にはすでに中国語訳が出ている(王純訳『新史学叢書 吉田松陰』中国上海通雅書局、南京明達書莊刊行)。梁啓超はこれ以前にも吉田松陰に対して関心を示しており、しばしば松陰に言及している²⁴⁾。徳富蘇峰『吉田松陰』は蘇峰が史伝作家として新境地を開いた名作であるが、注目すべきは第17章「松陰とマッシーニ」である。吉田松陰を小マッシーニになぞらえ、マッシーニの事績を詳しく説明している。マッシーニはイタリアの革命家であり、梁啓超の著作にしばしば登場する人物である²⁵⁾。

おそらくこれら以外にも徳富蘇峰を引用した箇所は無数に存在するであろう。英語を能くした洋学派としての蘇峰は、欧米の文献に精通しており、各所に最新の欧米事情を書き散らしている。歴史や文学思想も含め欧米事情の種本として蘇峰を梁啓超は利用したと私は見ている。

六

近年の梁啓超研究を見るまでもなく²⁶⁾、梁啓超に対して影響を与えた明治日本の知識人は徳富蘇峰に限られるわけではない。梁啓超においては、福沢諭吉はもちろん、群小の政治学書もたくさん参照されていた²⁷⁾。これは近年の諸研究が立証している。むしろこれまで研究者(とりわけ中国人研究者)の間で徳富蘇峰の影響が過大に語られすぎてきた嫌いがある。

私たちが梁啓超の文章を一読した時にそこはかたく感じるのは、福沢諭吉の影響である。ただし漠然と「福沢に似ている」といった感覚だけで根拠を示すことはできなかった。そのため、以前は、梁啓超に対する福沢の影響については研究者による明確な指摘はなかった²⁸⁾。これは梁啓超自

身が典拠を示さなかったことも影響している。

中国側の史料から見る限り、福沢諭吉よりむしろ徳富蘇峰の影響が意識されていた。逆に福沢は目立たない。徳富蘇峰がこれほどまでに着目されるのは、馮自由『革命逸史』の影響力の大きさによるところが大きいのであろう。当時の批判者たちは梁啓超の『飲氷室自由書』は徳富蘇峰を盗用したものと口々に言ったが、『飲氷室自由書』をめくってみれば、そうではないことはすぐわかる。蘇峰以外の様々な大量の日本文献が「盗用」されているのである。私たちは梁啓超の博搜ぶりに驚嘆するのみである。

馮自由が残した貴重な史料によって私たちは「歴史の現場」のそばにまでたどり着くことができた。しかし、その細部についてはなお検討が必要ということになろう。

注

- 1) 馮自由『革命逸史』(第4集)、中華書局、252頁。
- 2) 坂本多加雄「徳富蘇峰とジャーナリズム」『近代日本精神史論』講談社学術文庫、1996年。
- 3) 太田雄三によると、明治8年ころから10年弱の間に高等教育を受けた人々。東京大学をはじめ高等教育はほとんどすべて外国人教師に頼らなくてはならなかった時期である。内村が1861年生まれ、新渡戸と岡倉が1862年生まれである。(太田雄三『英語と日本人』講談社学術文庫、1995年、74頁。)
- 4) 徳富蘇峰「読書九十年」『読書法』講談社学術文庫、1981年、27頁。
- 5) 徳富蘇峰「読書九十年」23-25頁。
- 6) 石川禎浩「梁啓超と文明の視座」狭間直樹編『共同研究梁啓超』みすず書房、1999年、126頁。
- 7) 梁啓超(高嶋航訳注)『新民説』平凡社東洋文庫、2014年、109頁。
- 8) 『革命逸史』253頁。
- 9) 樽本照雄「梁啓超の盗用」『清末小説から』第20号、1991年、2頁。
- 10) 安藤英男「忙中閑あり」徳富蘇峰『静思余録』講談社学術文庫、1979年、268-269頁。
- 11) 「大陸」中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和編『辛亥時期期刊紹介』第二集、人民出版社、1982年。
- 12) 「学界時報 叢報之進歩」『新民叢報』第26号、1903年2月、81-82頁。
- 13) 「敬告中国之新民」『大陸』第6期、1903年5月、1頁。『大陸』は北海道大学図書館所蔵。

- 14) 「敬告中国之新民」『大陸』第6期、1903年5月、2頁。
- 15) 「与『新民叢報』総撰述書」『大陸』第6期、1903年5月、45頁。
- 16) 『革命逸史』(第4集) 253頁。
- 17) 「自序」『革命逸史』(初集)、5頁。
- 18) 趙映林「馮自由和他的『革命逸史』」『文史雜誌』2011年第5期、13頁。
- 19) 孔祥吉「略析馮自由『革命逸史』的嚴重缺陷」『博覽群書』2012年12月。
孔祥吉・村田雄二郎「辛亥革命史料抉抉之困惑——馮自由『中華民國開國革命史』与『革命逸史』異議」『広東社会科学』2012年第1期。
- 20) 中江兆民『一年有半』井田進也校注『一年有半・続一年有半』岩波文庫、1995年、65頁。
- 21) 夏曉虹『覺世与伝世——梁啓超の文学道路』上海人民出版社、1991年。
- 22) 齋藤希史『漢文脈の近代——清末=明治の文学圏』名古屋大学出版会、2005年、57頁。
- 23) 李国俊『梁啓超著述系年』復旦大学出版社、1986年、65頁。
- 24) 郭連友「梁啓超と吉田松陰」『「対話」と「深化」の次世代女性リーダーの育成』お茶の水女子大学リサーチペーパー、2007年。
- 25) 松尾洋二「梁啓超と史伝」狭間直樹編『共同研究梁啓超』みすず書房、1999年。
- 26) 狭間直樹編『共同研究梁啓超』みすず書房、1999年。鄭匡民『梁啓超啓蒙思想的東学背景』上海書店出版社、2003年。石云艷『梁啓超与日本』天津人民出版社、2005年。ほか多数。
- 27) 孫宏雲の一連の研究。
- 28) 區建英「中国における福沢諭吉理解」『日本歴史』525号、1992年。